月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol. 185



最恐の暗殺者ツインズが
ザナドゥに降臨!?

も～っと集まれ！ ファルコム学園

啄木鳥しんきのFalcom日和

ファルコムニュース

英雄伝説 碧の軌跡
いつか貴方とお茶会を

新キャラクターの情報や
特殊な交流イベントについても明らかに！

『京都ザナドゥ -桜花幻舞-』

カシウスやアリシア女王ほか
頼りになるキャラクターたちのビジュアルが到着！

『空の軌跡 the 2nd』



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

新キャラクターが続々と登場！
さらに探索や施設などの各種システムの詳細も到着！



京都が首都となった現代日本を舞台に異界・ザナドゥを巡るアクションRPG『京都ザナドゥ - 桜花幻舞 -』。発売直前号となる今回も新たな登場人物が続々と登場。さらに、本作の醍醐味でもある迷宮の探索イベントの詳細や、学園や市街で散策する中で起こる特殊イベントの情報も到着した！

京都ザナドゥ - 桜花幻舞 -

●**ジャンル**：デュアルディメンショナルARPG
●**対応機種**：Nintendo Switch 2、Nintendo Switch、PlayStation5、Steam
●**発売時期**：2026年7月16日
●**販売価格**：【パッケージ版（Nintendo Switch/PlayStation5/Steam(Limited Editionのみ)）】
通常版：7,920円　Limited Edition：10,560円
【ダウンロード版（Nintendo Switch 2/Nintendo Switch/PlayStation5/Steam)】
通常版：7,920円　Nintendo Switch 2 Edition：8,070円
Nintendo Switch 2 Edition アップグレードパス：150円
※価格はすべて税込です

『京都ザナドゥ - 桜花幻舞 -』公式サイト
https://www.falcom.co.jp/kyoxana/

ワイアット・ウォーレン Wyatt Warren

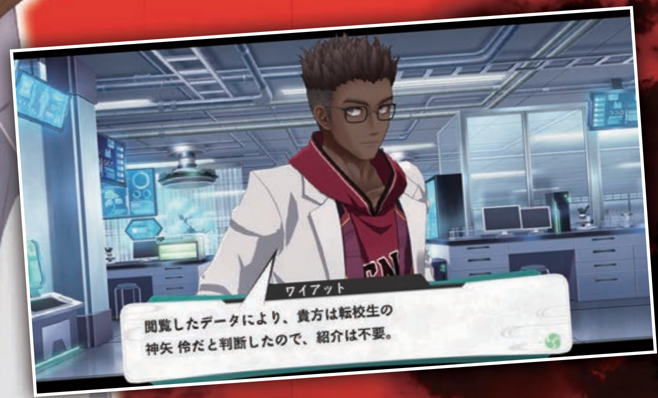
（CV：長岡龍歩）

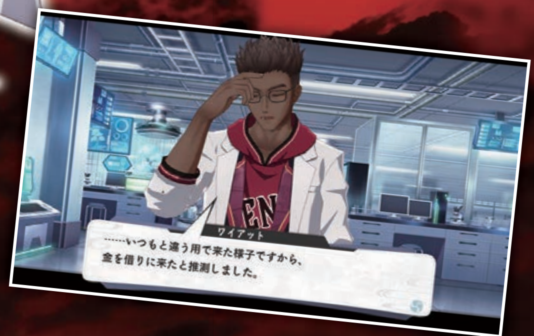


「用件は駿河総轄に会うためだと推測しました。――と私は言ったつもりです。」

年齢：18歳

比良坂学園の研究棟で受付を担当している、頭脳明晰な三年生の生徒。
企業連合ゾディアックに名を連ねる米国企業から派遣されたメンバーだが、駿河のチームには所属しておらず、彼の部下というわけでもない。
事務的な口調で淡々と話すが、時々レイを怪しげな実験に誘ったり頭の回転の速さ故に妙な早とちりをすることも。





結野 茉莉奈 Marina Yuino

（CV：菱川花菜）

「どどどど、どうしよう……
こんな時にルアーナ様がいないだなんて……！」



年齢：15歳

比良坂学園の礼拝堂で受付を担当している女子生徒。
「シエナの聖女」と呼ばれることもあるルアーナを崇敬しており、ルアーナがリーダーを務めるチーム《名も無き果実》にも所属。
天然で間の抜けた振る舞いをすることが多いが、一人前のシスターを目指して日々勉強中。





木埜 光孝 Mitsutaka Kino

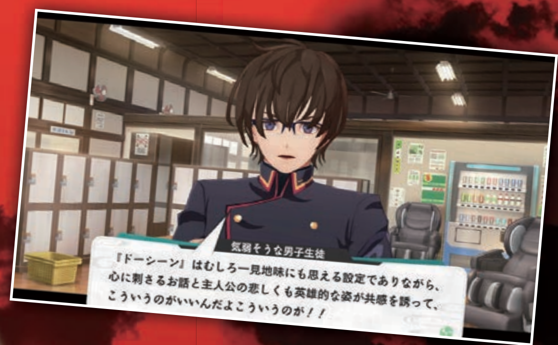
（CV：柳晃平）

「悪事を照らすは天の道！
悪人裁くは拙者の道！」



年齢：18歳
装魂霊具：十手型

特殊な交流イベント「奇縁小噺」に登場するキャラクター。
宮城県出身の比良坂学園二年生。
特撮ヒーローに強い憧れを抱いており、適格者に覚醒したことがきっかけで「本物のヒーロー」を目指して学園への入学を決めた。
しかし、元々の気弱でネガティブな性格が災いし、自分がチームの足を引っ張っているのではないかと常に悲観的な様子を見せる。





篠塚 紗百合 Sayuri Shinozuka

（CV：明智璃子）

「アンタが例の転校生か。盗み聞きなんて大層な趣味をお持ちじゃない。」



年齢：17 歳
装魂霊具：和傘型

特殊な交流イベント「奇縁小噺」に登場するキャラクター。
比良坂学園の二年生で岐阜県出身。
適格者の名家の生まれらしく上品な立ち振る舞いを見せるが性格は少々キツく、レイへの当たりも強い。
和傘型の装魂霊具による戦闘を得意としており、学園では中位ランクのチームでエースとして活躍中。





瀧川 小町 Komachi Takigawa

（CV：東ゆの）

「さあさあ！アツアツの内にガブリといっちゃってくださいっ！」



年齢：16 歳
装魂霊具：ハンマー型

特殊な交流イベント「奇縁小噺」に登場するキャラクター。
いつも明るくフレンドリーな福岡県出身の一年生女子。
かなりの食いしん坊らしく、グルメ関連の話題で周囲と盛り上がることもしばしば。
適格者の家系にあたるが、伝統的な名家というわけではなく庶民的な家庭で育ったらしい。





赤染 霜志 Soshi Akazome

（CV：桑野晃輔）

「――ただ、自分の手で戦うだけだ。誰の手も借りるつもりはありません。」



年齢：16歳
魂霊具：鬼の手型

特殊な交流イベント「奇縁小噺」に登場するキャラクター。
隻腕の一年生男子で、愛智県出身。
左腕を補うように現れる巨大な鬼の手型の装魂霊具を持ち、怪異を引き裂くような戦いぶりを見せる。
周囲と関わることを避けているらしく、常に一人で行動している。





仁藤 力也 Rikiya Nito

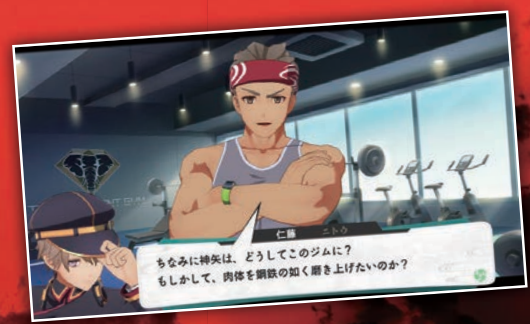
（CV：中山祥徳）

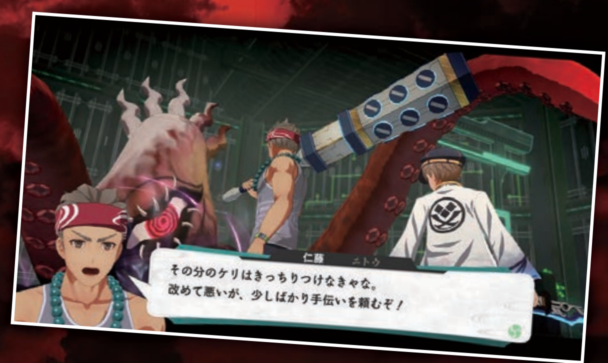
「学園でのトレーニングに飽き足らずここに来るとは、との意気や良し、だ！」



年齢：18歳
装魂霊具：金砕棒型

特殊な交流イベント「奇縁小噺」に登場するキャラクター。
那良県出身で肉体派の三年生男子。
豪快な性格で良くも悪くも暑苦しいが、己の肉体を磨くことにかけてはかなりストイックなタイプ。
怪異に対抗するために比良坂学園で入学したらしく、学内ランキング上位の体育会系チームでリーダーを務めている。





古部 巴 Tomoe Furube

（CV：渡瀬結月）

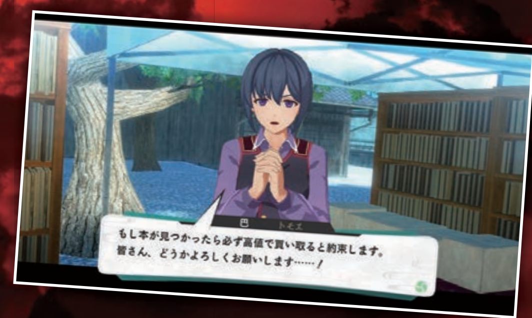
「何百、何千冊もの読書に付き合ってくれた物なので、それなりに愛着があります。」



年齢：18歳
装魂霊具：杖型

特殊な交流イベント「奇縁小噺」に登場するキャラクター。
清楚で読書好きな、永崎県出身の三年生。
比良坂学園では中位ランクの女子チームに所属している。
やや潔癖気味なところがあり、転入以来、様々な噂が広まっているレイに対してはかなり警戒している様子。





学園から依頼を受けて迷宮を探索しよう！

本作のタイトルにもなっている異界・ザナドゥの探索。探索は物語の舞台となる比良坂学園の各施設から依頼を受けることで進行することができる。依頼は施設によって内容が異なっており、その内容を達成し帰還することで、学園から「報酬」と「貢献度」が得られるようになっているのだ。

研究棟からの依頼



研究棟で受ける「異界素材」調達依頼は、迷宮内の特殊な地形を破壊することで入手することができます。

訓練場からの課題



訓練場で受ける討伐依頼は、迷宮内で指定された数の怪異を撃破することで達成となります。

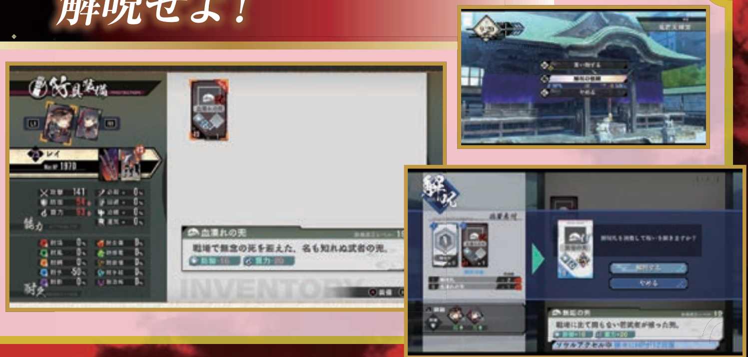
礼拝堂からの要請



礼拝堂で受ける救助要請依頼は、「不確定領域」と呼ばれる迷宮内のエリアで遭難している生徒を救助することで達成となります。

迷宮で入手した“呪われた防具”を解呪せよ！

迷宮を探索していると“呪われた防具”を入手することができる。これは、現実の世界に持ち帰った後に、京都・四条通りにある“鬼若天神宮”で解呪することで特殊な性能を持つ防具へと戻すことができるようになっている。解呪に必要な「解呪札」は鬼若天神宮で購入することができるので、呪われた防具を入手した際はぜひ立ち寄ってみよう。



各地のキャラクターと交流を深めて特殊な交流イベント「譚歌抄」「奇縁小噺」を楽しもう！

比良坂学園や京都市街の散策中に特定の場所で登場人物と交流を深めていくと「譚歌抄」「奇縁小噺」と呼ばれる特殊な交流イベントが発生する。イベントを進めていくと「交流ポイント」が獲得でき、一定値に達するとさらに特別なイベントを見ることができるのだ。また、ポイントがMAXになると「友好の証」として希少なアイテムもゲットできるので、学園はもちろんのこと、市街の人々とも積極的に交流していこう。

譚歌抄

フウカ、カズキ、セナ、そ担任の竜宮など、メインストーリーに関わる主要人物との交流が描かれます。



奇縁小噺

比良坂学園に在籍する個性豊かな生徒たちにスポットをあてた個別のストーリーイベントが描かれます。

空の軌跡 the 2nd
ソラノキセキ　ザ・セカンド



カシウスほか頼りになるキャラクターたちが登場！ さらにアーツや料理システムの情報も到着！

2025年に「軌跡」生誕20周年記念として完全フルリメイクされた『空の軌跡 the 1st』。その続編となる『the 2nd』。今号では、エステルたちを取り巻く頼りになる大人なキャラクターたちの新規ビジュアルが登場！　さらに、アーツや料理といったシステムの詳細も到着した。

『空の軌跡 the 2nd』公式サイト
https://www.falcom.co.jp/sora2/

空の軌跡 the 2nd
●ジャンル：ストーリーRPG
●対応機種：Nintendo Switch 2、Nintendo Switch、PlayStation 5、Steam
●発売時期：2026年9月17日
●販売価格
【パッケージ版】通常版：8,800円　Nintendo Switch 2 Edition：8,950円
ウロボロスBOX：13,860円
Nintendo Switch 2 Edition ウロボロスBOX：13,860円
【ダウンロード版】通常版：8,800円
Nintendo Switch 2 Edition：8,950円
Nintendo Switch 2 Edition アップグレードパス：150円
デジタルデラックス版：12,650円　シーズンパス：4,180円
※価格はすべて税込です

カシウス・ブライト准将
（CV：浜田賢二）

年齢：45歳
気さくでダンディなエステルの父親。
軍人として王国軍で目覚ましい活躍を見せた後、遊撃士に転向し、大陸全土で依頼をこなすベテラン遊撃士としてその名を馳せるようになった。
リベール王国を震撼させた事件（the 1st）を契機に遊撃士を辞し、王国軍への復帰を決意。軍から離れられない立場になったものの、一人の父親としてエステルの新たな旅立ちを見守る。

「エステル、どうか頼んだぞ。ヨシュアを――あの馬鹿息子を連れ戻してくれ。」









モルガン将軍

（CV：堂坂晃三）

「もう二度と、リベールの民を傷付けるようなことはさせぬ。」

年齢：62 歳

王国軍のトップとして国境師団を率いている頑固でかくしゃくとした老軍人。
元部下・カシウスに起こった出来事がきっかけで遊撃士をひどく嫌悪するようになっていたが、リベール王国での事件解決に奔走したエステルたちの活躍を機に「遊撃士嫌い」は幾分か緩和された様子。
将軍としての立場は変わらないものの、王国軍に復帰したカシウスの采配を信頼し彼に主導権を預けている。









マクシミリアン・シード中佐

（CV：高梨謙吾）

「君たちは、どの程度《結社》の存在を知っている？」

年齢：32 歳

レイストン要塞で守備隊長を務めている誠実で生真面目な王国軍人。
カシウスから教わった剣技に加え高度なアーツも臨機応変に使いこなす万能タイプで、リベール王国軍の中でもトップクラスの実力を誇る。
王国で発生した事件（the 1st）を阻止した功績が認められ、若くして少佐から中佐へと昇格することになった。









アリシア・フォン・アウスレーゼ

（CV：中村綺里子）

「リベールの希望の翼、
好きなように使ってみなさい。」



年齢：60 歳

気品と威厳に加え、真の強さも兼ね備えたリベール王国の第 26 代女王。
民衆の生活を第一に考えて国政に励むその姿は世代を越えて国民に慕われ、愛され続けている。
王国を襲った事件（the 1st）を機に、隣国のエレボニア帝国、カルバード共和国も含めた周辺諸国に安定をもたらすことで自国の立場を守ろうとしている。







デュナン・フォン・アウスレーゼ公爵

（CV：小田柿悠太）

「この最高位の王位継承権を持つ私を
馬鹿にしておるのかっ!?」



年齢：35 歳

リベール王国の王位継承権を持つアリシア女王の甥。
執事のフィリップに甘やかされて育ったためか、わがまま放題で傍若無人。
国民からの人望も極めて低い。
リベール王国の事件（the 1st）では主犯格に傀儡としていい様に利用されてしまい、罰として離宮での謹慎を申し付けられている模様。







フィリップ・ルナール
（CV：喜屋武和輝）

年齢：58 歳

20 年以上デュナン公爵の執事を務めている穏やかで礼儀正しい老紳士。
デュナン公爵が幼少の頃から教育係も担当していたが自分の教育が行き届かなかった点については負い目を感じている。
離宮で謹慎となった後も、相変わらずデュナン公爵のわがままに振り回される日々を送っている。

「せっかく陛下のお許しが出たのです。それだけでも僥倖と思いませんと……」



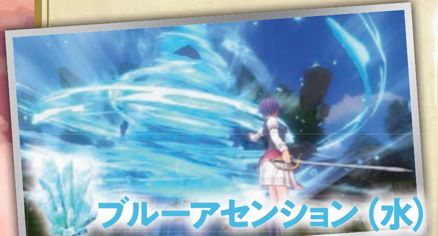




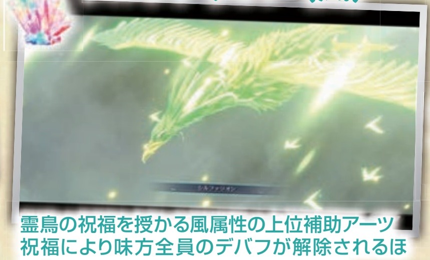


結晶回路（クオーツ）を自分好みに組み込んで多彩な導力魔法（アーツ）を使いこなそう！

本シリーズでは戦術オーブメントにクオーツを組み込むことで、使用者の能力を強化するほか、その属性値によって様々なアーツが使えるようになっている。そして、『空の軌跡 the 2nd』では、戦術オーブメントもパワーアップ。クオーツをセットするためのスロットが 6 つから7つに増加したので、前作以上にセットアップしていくことが可能となった。また、スロット自体を強化することで、上位クオーツがセットすることができ、高威力のアーツも使用可能に。新たなクオーツを入手した際は、ぜひその組み合わせに思い悩んでほしい。



ブルーアセンション（水）
圧縮した水の塊を一気に解放し、大爆発を引き起こす上位攻撃アーツ
ＳＳクラスのダメージを与えるほか、90％の確率で敵を封魔状態にする



シルファリオン（風）
霊鳥の祝福を授かる風属性の上位補助アーツ
祝福により味方全員のデバフが解除されるほか、敵のアーツ攻撃を１度だけ反射する



アビス・フォール（時）
異界より使者を召喚し、戦域に破滅をもたらす上位攻撃アーツ
X+レベルの威力を持つほか、スタン大の効果も併せ持つ



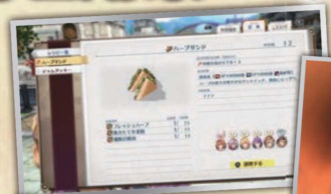
ロストメビウス（空）
歪められた空間が敵の身体を捻りつぶす上位攻撃アーツ
ＳＳレベルの威力に加え、遅延中＆ MOV 大幅ダウンの効果も与える



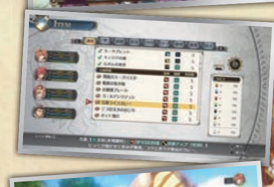
ゾディアック（幻）
味方全員の能力を高める、幻属性の上位補助アーツ
５ターンの間全能力がアップするほか、強運も付与される。

効果的に使用するとかなり強力!? 様々な料理と料理効果

レシピを覚えて料理手帳に記載された料理は、冒険を続けていく中で入手した食材を使用することで、各プレイヤーキャラが調理することができる。料理は種類によって体力回復や状態異常回復、そして一定時間各種ステータスアップなど、様々な効果を持っているので、戦闘時に使用することで、戦局を有利に運んでいくことができるのだ。今作では料理の中に新たに「攻撃料理」が登場。その名の通り、使用することで敵にダメージを与えることができるので、CP や EP が無いピンチの時には使ってみるのもひとつの手になるはずだ。また、一部の料理は戦闘中ではなくとも使用することができるので、メインメニューで使用することでクイックバトルでも効果を発揮してくれるほか、その効果中にコマンドバトルに移行しても最大２ターンは効果を持続してくれるので、これも有効に活用してみよう。





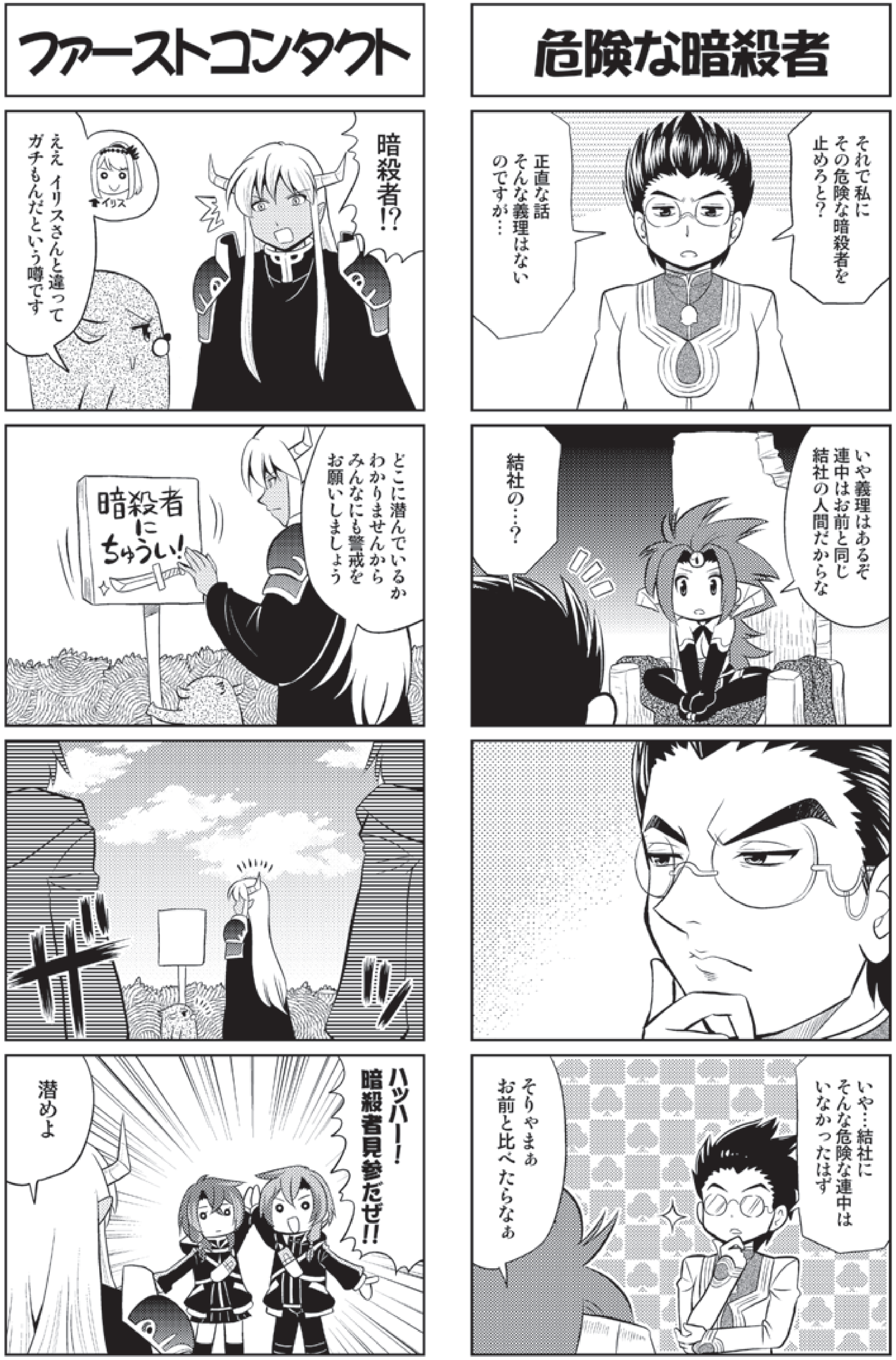




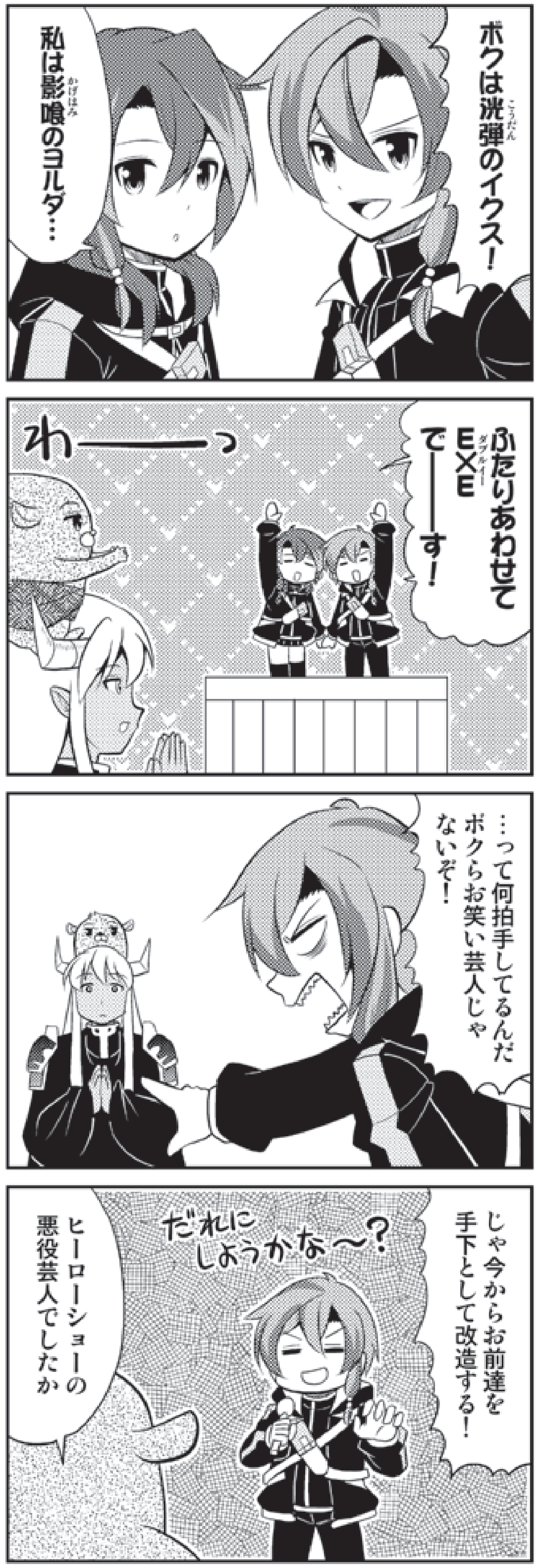


★ファル学では誰も死にませんのでご安心ください★





イクスとヨルダ



危険なふたり



教授の噂



双子が苦手な者たち



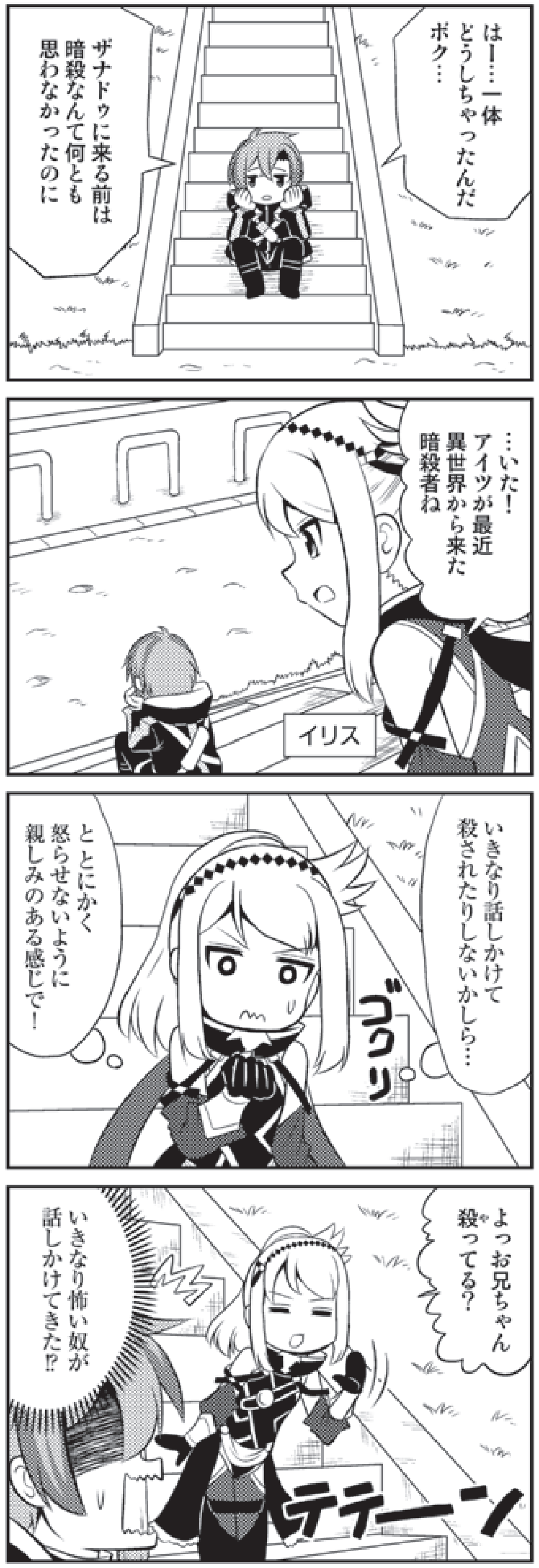
いたいけなる者たち



感じた違和感



フレンドリー暗殺者



優しい暗殺者



気をそらそう



もっと気をそらそう



生きがい



ヨルダの能力



イクスの能力



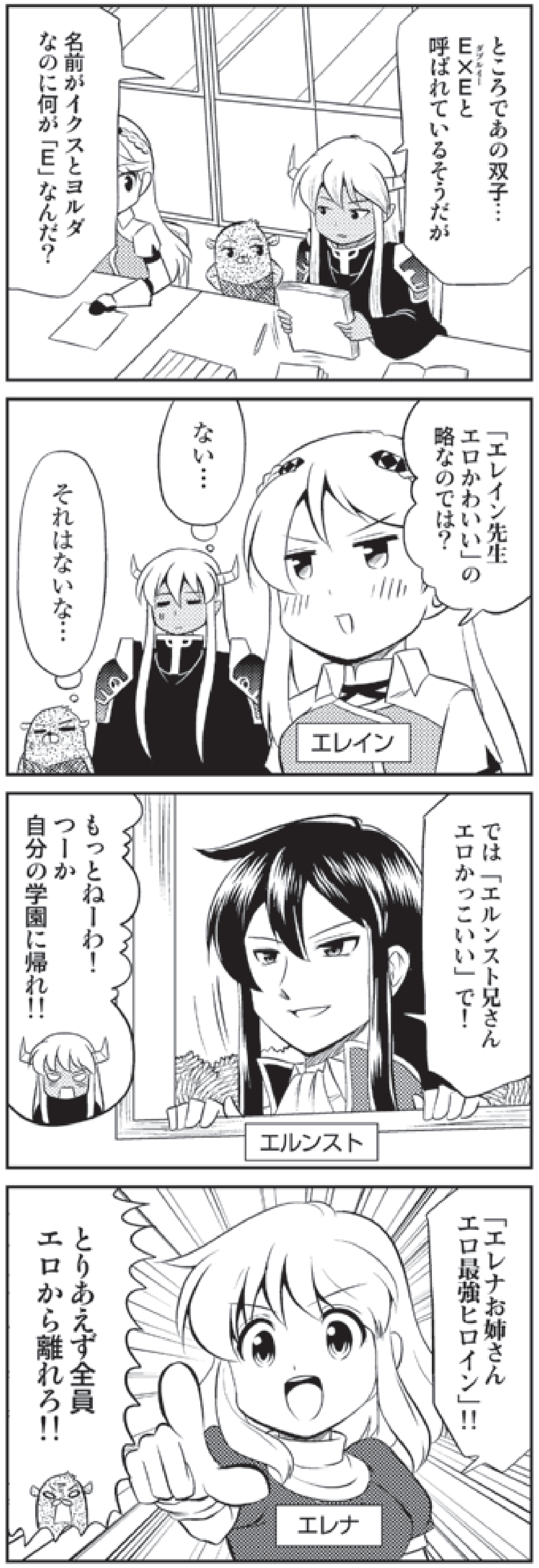
イクスの選んだ道



危険な妹



ダブルなE





英雄伝説 創の軌跡
THE MISERABLE SINNERS 01
漫画：墨天業
《仮面の隠者》《暗殺者》《自律人形》
それぞれの思惑を胸に
運命と真実に迫る物語
定価:1000円(本体909円+税)
ISBN978-4-8021-3309-8
発行:フィールドワイ 発売:メディアパル
©Nihon Falcom Corporation. All rights reserved.
©BOKUTENGOU ©Field-Y



日本ファルコム創業40周年を余裕で超えても、尽きることなく怒涛の勢いでニューカマーが押し寄せるファルコム学園！いつまで続くのかこの進撃！ そして天才・新久保だいすけに果たして限界はあるのか!? 様々な難問に挑戦し続けるご存知“ファル学”第4巻！
実は、計10冊目の『ファルコム学園』！
も〜っと集まれ！
ファルコム学園④
新久保だいすけ
定価：本体 909 円＋税
ISBN 978-4-8021-3387-6
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved. ©DAISUKE ARAKUBO ©FIELD-Y

▶ファルコムニュース◀
ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

「ドラゴンスレイヤー英雄伝説」ドット絵アクスタ登場！

懐かしいけど新しい ドット絵 アクリルスタンド／キーホルダーが「八刻堂ECショップ」から登場。8bitレトロゲーム風のピクセルアートで描かれたキャラクターが、厚さ10mmのクリアなアクリル素材に美しく映えます。





■商品ラインナップ
[単品]
セリオス王子 アクスタ／キーホルダー　リュナン アクスタ／キーホルダー
ロー アクスタ／キーホルダー　ソニア アクスタ／キーホルダー
ゲイル アクスタ／キーホルダー　ディーナ姫 アクスタ／キーホルダー
ロゴ アクスタ

[セット]
ザ・レジェンド・オブ・ヒーローズ7種セット

■予約期間：7月10日(金)まで　■発売元　株式会社エイトグロース

八刻堂URL	https://hakkokudo.com/

エステルボイス入り目覚まし時計発売！

株式会社東栄より、「空の軌跡」エステルのボイス入り目覚まし時計の発売が決定。エステル役・高柳知葉さんによる、完全新規録りおろしボイスを収録した特製目覚まし時計。種類は2種類。



[ホワイトモデル]
エステルが“恥ずかしがってなかなか起こしてくれない”ボイス入り目覚まし時計



[ブラウンモデル]
エステルが“呆れながら起こしてくれる”ボイス入り目覚まし時計

■発売日：2026年6月24日
■価格：各8,800円
■発売元：株式会社東栄

商品ページ
[ブラウンモデル]https://fultonjapan.com/products/kisekiclock_bronze
[ホワイトモデル]https://fultonjapan.com/products/kisekiclock_white

特設ページ
https://fultonjapan.com/pages/kiseki-clock

MODEROID「《緋の騎神》テスタ=ロッサ」予約受付中

「英雄伝説 閃の軌跡」シリーズより、七体の騎神の一角《緋の騎神》「テスタ＝ロッサ」がMODEROIDシリーズで初プラキット化。《灰の騎神》ヴァリマール、《蒼の騎神》オルディーネ、《銀の騎神》アルグレオン、に続く騎神4体目のプラキット化となります。







頭頂高約180mm。各関節可動。交換用手首および専用武器の剣が付属し、劇中さながらのアクションポーズを再現可能。全身各部の宝石はクリアパーツで再現。各種成形色とクリアパーツに加え、一部彩色済みパーツにより組み立てるだけで劇中イメージに近い色分けを再現できます。

■製品仕様：組立て式プラスチックモデル・ノンスケール・全高：約180mm
■価格：9,500円　■発売時期：2026年12月予定
■予約期間：2026年6月16日(火)~7月29日(水)

グッドスマイルカンパニー公式ショップ	https://www.goodsmile.com/ja/product/1137942/

1/8スケールフィギュア「アリサ・ラインフォルト」予約受付中

「軌跡シリーズ」より、旧《VII組》の一員にしてRF（ラインフォルト）グループ令嬢の「アリサ・ラインフォルト」がフィギュア化。トールズ士官学院卒業後の、『閃の軌跡III』から『創の軌跡』にて登場した成長後の姿を立体化しました。愛用の導力弓を構えた凛とした佇まいに、真剣な表情や風になびく髪の造形が映える、気品あふれる仕上がりです。





■製品仕様：塗装済完成品フィギュア（一部組立フィギュア含む）
■素材：PVC・ABS・アクリル・金属棒・PC・ナイロン
■発売月：2026年12月
■メーカー受注締切：2026年7月21日(火)

ショップページ
[コトブキヤ オンラインショップ]
https://www.kotobukiya.co.jp/product/detail/p4934054081219/
[カドスト ファルコム電撃ストア]
https://store.kadokawa.co.jp/shop/g/g7015026123121/



"輝く環"を目指す一行の前に結社《身喰らう蛇》の執行者たちが次々と現れる。
エステルとヨシュア、アガットの前に立ちはだかる《剣帝》レオンハルト。
かつて兄と弟のように育ったレーヴェとヨシュアが、万感の思いを込め剣を交える！
空の軌跡、ここに完結！
英雄伝説 空の軌跡SC
～絆の在り処～⑦
啄木鳥しんき
定価：1,210円（本体1,100円+税）ISBN 978-4-8021-3516-0
発行：フィールドワイ 発売：メディアパル
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved.
©Kitsutsuki Shinki
©FIELD-Y
www.field-y.co.jp



啄木鳥しんきのFalcom日和
先日、京都で催された『BitSummit PUNCH』というインディゲームの祭典に遊びに行ってきたのです。
そこに『風の伝説ザナドゥ』と『ぽっぷるメイル』のグッズを出展されてる企業さんがいらしていて、嬉しくて
ついお買い物。会計の間に少しだけお話を聞かせていただけたのだけど、なんかそれだけでも、グッズに
対する好きとこだわりが伝わってきて、作品を愛を持って扱ってくれるっていいなぁ…と思ったのでした。
だってステッカーの形と大きさにちゃんと意味があるとか、すごない!?

第2話

『クロスベルの休日』

西ゼムリア通商会議。
ディーター・クロイス新市長の主催した経済関連の国際会議で、帝国、共和国、リベール、レミフェリアの首脳が一堂に集まった。
自治州クロスベルの未来を決める大切な会議だったのだが、各国の思惑が交錯して事件が起こり、友好的とはいえない雰囲気での幕切れとなってしまった。
大きなうねりに呑みこまれ、クロスベルの街は緊張に包まれている。
それでも、俺たち特務支援課は、目の前で困っている人たちの為に全力を尽くす。
いかに小さなことであろうと、その積み重ねこそが、クロスベルの内外にある〝壁〟を打ち砕くことに、繋がってると思うから……

「おつかれさま、ロイド。式典は緊張するわね」
パールグレイの美しい少女、エリィが声をかけてきた。
特務支援課の頼れる才媛であり、マクダエル議長の孫娘である。
「ああ、本当だな。でも、エリィはこういうのに慣れてるんじゃないか？」
「祖父の仕事柄、フォーマルな場に呼ばれることは多いけど、だからといって慣れるものじゃないわ」
「そういうものか」

エリィの様子は、すっごく落ち着いているように見えたが……あれでダメなら、俺なんか、よっぽどそわそわして見えたんじゃないだろうか？
「さすがに、各国のトップともなると、あんな事件があっても堂々としたものね」
「ああ、大したものだよ」
俺たちは式典会場である空港を後にする。
今日は、エレボニア帝国のギリアス・オズボーン宰相と、カルバード共和国のロックスミス大統領の帰国を見送る式典があった。
特務支援課が通商会議の警備に携わったので、その代表者として、俺とエリィが参列したというわけだ。
「ねえ、ロイド。このあとは用事ある？」
「いや……そういえば、セルゲイ課長から午後は休むように言われてたな」
時計を見ると、もう午後一時だった。
「通商会議の前から、ずっと休みを取ってなかったものね」
「仕方ない。会議中は他の支援要請を受けられなかったからな」
歴史的な会議が開かれて各国のトップが集まるとあって、大勢の外国人観光客が訪れ、市内では細かいトラブルが急増していた。
逆に、警察も警備隊も要人の警護に追われ、街の治安維持は後手に回ってしまった。

「市民のことは、遊撃士たちが気を遣ってくれたみたいね」
「そうみたいだな。いつもありがたい」
「本当ね。けれども、また警察が仕事してない、って街の人たちに言われちゃうわね」
「うーん、今回ばかりはつらいところだな。セルゲイ課長には休めと言われたけど……やっぱり、街を見回ったほうが、いい気がする」
「相変わらずね、ロイドは」
　くすくす、とエリィが笑う。
　我ながら生真面目すぎるとは思うが、これが性分だ。
「エリィはどうするんだ？　なにか予定が？」
「これから友人と街を見て巡るんだけど、よかったらロイドも一緒にどうかと思って」
「え？　お邪魔にならないかな？」
「むしろ、あちらが希望してるの。ロイドも知っている人よ。ロイドは私とふたりで散歩しても巡回みたいになっちゃうけど、他の人がいれば休暇になるでしょう？」
「なるほど、いいかもしれないな」
　エリィとふたりで街を歩くのは魅力的だ。
　べつに容姿だけが全てではないが、こんな綺麗な女性（ひと）と一緒にいると思うだけで、いまだに緊張することがある。

　いつもの格好も似合っているが、今日は式典の参列ということもあって、街中でしか着られないような服装だった。
　白いワンピースを腰のところでリボンで留め、ピンク色のジャケットを羽織っている。珍しく黒タイツではなく素足だった。
　エリィと街を巡れたら、きっと楽しいだろう。
　けれど、市民への配慮が足りてないと感じている今だと、彼女に指摘されたとおり、散歩というよりも巡回になりそうだった。
「このまま街を歩いて、どこかの店に入ったら、商品を見る前に〝何か困ったことはありませんか？〟と尋ねてしまいそうだよな」
「ふふ、ロイドらしいわね」
「エリィの言うとおり、他の人もいれば、ちゃんと休めるかもしれないな」
「無理にずっと一緒じゃなくてもいいから、お昼くらいは、どう？」
「気遣ってくれてありがとう。喜んで同席させてもらうよ」
　それにしても、俺の知ってるエリィの友人って、誰だろう？
　クロスベルの中心にある広場へとやってきた。
　会議中のお祭りのような賑わいから一転、そこかしこで、自治州の将来について話し合う市民たちの姿が目立つ。

広場に出ている屋台のひとつに、エリィが向かう。
俺は後を追いかけた。
こちらを見つけ、ひとりのシスターが小さく手を振る。
「お待たせしました、リースさん」
待っていたのは、リース・アルジェントというシスターだった。
エリィが留学先のアルテリア法国で知り合った友人で、たしか俺たちの、ひとつ年上。十九か二十歳になると言っていた。
清楚な雰囲気のある落ち着いた女性だ。
「こんにちは。俺も同席してよかったんですか？」
「もちろんです。今回は私のほうからエリィさんに、誘ってもらえるよう、お願いしました。よろしくお願いします」
「こちらこそ……その、どういった理由で、俺のことを？」
「食事は大勢のほうが美味しいですから」
「なるほど」
まさか、本当にそんな理由ではないだろう。
何かしら〝後で真実を告げるから今は詮索しないで〟という意味だと受け取った。

なんせ彼女は、ただのシスターではない。
教会内でも特殊な組織――《星杯騎士団》の従騎士だ。
古代遺物（アーティファクト）の回収を目的としており、いくつもの特別な力を持っている。
この街（クロスベル）にも、調査のために訪れているらしい。
リースが、まるで空の女神（エイドス）の教えを説くような、静かで神々しい口調で言う。
「……ロイドさんはクロスベルの出身だとか」
「はい」
「地元の人しか知らないお店も、あるかと思いまして」
「え？　それは……食べ物の？」
「もちろんです」
「あの……ご期待に沿えるかわかりませんが……」
食べることが大好きな人だとは聞いていたが、予想以上に熱心だった。
まさか、本当に〝地元の店を知っていそう〟という理由で呼ばれたんだろうか？
エリィが肩を落とす。
「リースさんが、ロイドも連れて来て欲しい……と言うから、どうしてかと思ってたら……」
「明確な理由と的確な人選のはずです」
ぼそっとリースが独りごちた。

　ははは、と思わず笑い声をこぼしてしまう。
「まぁ、大丈夫だよ、エリィ。せっかく休暇をもらってるんだし、美味しいものを食べに行くのも悪くない」
「それもそうね」
　エリィが微笑んだ。
　リースが周りを見渡す。
「まず、このあたりで何か食べますか？」
　広場には、いくつか屋台が出ていた。クレープやアイスクリームを売っている。
　もう昼だし、てっきりレストランに行くのかと思っていたが、そういうのもいいだろう。
「リースさん、何か気になる屋台はありますか？」
「どれも悪くなかったです。なかなかの味でしたね」
　過去形だった。
　俺とエリィは首をかしげる。
「もう一通り、食べたことがあるんですか？」
「広場で待っていてほしいと言われたので……」
「ええ」
　エリィがうなずいた。

　リースが微笑みをこぼす。
「広場で屋台の物を、一通り食べて待っていました」
「えぇっ!?　全部!?」
「いえ、全部ではありません。クレープもアイスもポップコーンもカフェも、いくつも種類があるので、全メニューは無理でした……」
　残念そうに言った。
　どうやら、この広場にある屋台を一通り回った後らしい。
「あの、それじゃあ、お腹は、もういっぱいなんじゃ？」
「どうしてですか？」
　冗談めかすこともなく本気でわからない、という顔をして尋ねられた。
　こっちが聞きたい。どうしてお腹がいっぱいになってないんだろう？
　さすがは、《星杯騎士団》の従騎士だ！
　いや、あまり関係ないか。
「なんにしても、大丈夫そうなら、どこかお店に行きましょう。リクエストはありますか？」
「とてもお腹が空いているので、こってりしたものがいいですね」
　けっこう食べたはずなのに……
　聞いているだけで、こっちのお腹が膨れてしまいそうだった。

これは、生半可なところに連れて行ったら、がっかりされてしまうに違いない。
　俺はしばらく考えて――
「よし、龍老飯店（りゅうろうはんてん）に行きましょう」
「どんなお店なんですか？」
「東方の料理を出す店です。あ、辛いものは平気ですか？」
「辛いものも大好きです」
　俺たち三人は、東通りへと向かった。

　龍老飯店に向かう途中、遊撃士協会の前を通る。
　ちょうど、知り合いが扉を開けて出てきたところだった。
　逞しい体つきの男性で、茶色い髪を束ね、ピンク色のシャツの胸元をはだけさせている。鍛え抜かれた筋肉が見えていた。
「あら、ロイド。ひさしぶりじゃない」
　こちらを見つけて、ニッと笑みを浮かべる。
　彼はれっきとした男なのだが、女性みたいなしゃべり方をした。

「こんにちは、ミシェルさん」
「いいところに来たわ。お願いしたいことがあるの」
「えっ？　遊撃士協会が、支援課に……ですか？」
　もともと、遊撃士は街の便利屋のような側面を持っており、市民に厚く支持されている。それに倣って警察内に作られたのが、特務支援課だ。
　くねっ、とミシェルが、しなを作った。
「そうなの。とっても困ってるのよ～」
　エリィは慣れているのだが、リースが目をすがめた。
「クロスベルには、こういう人が多いんですか、エリィさん？」
「ど、どうかしら？　私は、よく知らないけど……」
「そう……さすがは、魔都クロスベル」
　ミシェルが話を続ける。
「実は、さるお方にクロスベルを案内する仕事が入ってるのよ。もともとは、アリオスが引き受ける予定だったんだけど、急に別件が入っちゃったらしくて」
「そうなんですか」
「最近、とくに忙しい様子なのよね。何か聞いてないかしら？」
「俺もアリオスさんとは会ってないです」

「そう……」
「他のメンバーも手がいっぱいなんですか？」
「そうなのよ。リンとエオリアは気になることがあって調べてもらってるし、市民からの依頼もひっきりなしなのよね」
「なるほど。俺たちに手伝えることがあれば、いつでも言ってください」
「じゃあ、この件、お願いできるかしら？」
「詳しい話を教えてもらえますか？」
「ええ。ここじゃナンだから……」
ちょいちょい、とミシェルに手招きされ、俺たちは遊撃士協会の中に入る。
ドアを閉じると外の喧噪が遠くなった。それだけ中の会話も外に聞こえないというわけだ。
ミシェルが、リースのほうを見て首をかしげた。
「ところで、そちらのシスターは？」
「はじめまして。リース・アルジェントといいます」
「ああっ、あなたがそうなの。噂は聞いてるわ。愛想がよくて品があって博識なんですってね」
「そんな噂が？　ありがとうございます」
「他のことも聞いてるけど……ふぅん……〝アルジェント〟ね」
「はい」

品定めするようなミシェルの視線に、リースは静かな笑みを返す。
「まぁ、いいわ。ロイドたちのお友だちみたいだし」
エリィが首肯して請け合った。
改めて依頼について説明を受ける。
「依頼はクロスベルの観光案内よ。さるお方が政府の紹介した部分だけでなく、一般市民の暮らしも見たいと希望されてるの。アタシとしても先日の会議があんな幕切れになっちゃったでしょ？　このまま悪い印象を持って帰られたくないと思うのよね」
「もしかして、会議に参加されてた方なんですか⁉」
「フフ、そういうことになるわね。広場に、十四時までに行ってもらえるかしら？　人手がないからアタシが行くしかないと思ってたけど、お願いできるなら助かるわ」
ミシェルは遊撃士協会の受付だ。事務所を空けてしまうと、いろいろと困ったことになるだろう。
「わかりました。引き受けます」
「ありがとう、恩に着るわ！　アタシから先方に伝えておくから、広場の鐘の前で待ってて」
「それで、先方の名前は？」
「フフ、会えばわかるわよ」
ミシェルが、ギュッとウィンクした。

　遊撃士協会を出て、エリィとリースに相談する。
「俺はミシェルさんの依頼を受けるとして、エリィたちはどうする？」
「先方とリースさんがよければ、一緒に回ったらどうかしら？　クロスベルの観光という目的は同じなのだし、警察官の私たちだけより、教会のシスターの話も聞けたほうが、〝市民の暮らしが見たい〟という希望に叶うと思うの」
「私はかまいません」
「わかった。じゃあ、広場で会って、そこで訊いてみよう。約束の時間まで、もうあまりない」
「そうね。急ぎましょう」
「私は……早く美味しいものが食べられれば、なんでもいいです」
　実は、あまり考えずに話してるんじゃないか？
　一抹の不安を感じつつ、広場に戻るのだった。

　広場の鐘の前につく。
　まだ先方は来ていないようだ。貴人らしき相手の姿は見当たらなかった。

　ハッ！　とリースが顔色を変える。
「あれを見てください！」
「えっ、何かありましたか⁉」
　ただならぬ様子に、俺は警戒心を高めた。
　エリィもジャケットの下に手を伸ばす。そこには、彼女の得意武器である導力銃が収めてあった。
　リースが指さしたのは、ごく普通の屋台だ。
「スイーツの屋台です。さっきまでは、ありませんでした」
「あ、ああ……」
　そういうことか。
　俺は肩を落とした。
「そろそろ、オヤツの時間ですからね……特定の季節と時間にだけ出てる屋台もあるんですよ」
　よく兄貴が買ってくれたっけな。懐かしい。
　ほ～、とエリィが吐息をつく。
「驚かさないでください、リースさん」
「あら、驚かせましたか？」
「あの……」

すこし離れたところから、声をかけられた。
振り向くと、ライム色の髪の凛々しい女性が立っている。黒色のスーツに身を包んでいるが、見間違えようもない。
「ユ……ッ!?」
思わず声をあげそうになり、なんとか呑みこんだ。
エリィも同じく。
要人の身辺警護をするＳＰの格好をした女性は、大陸全土で知らぬ者がいないほどの有名人だった。
ユリア・シュバルツ准佐。リベール王室の親衛隊リーダーを任されている士官。その凛々しい姿や華麗な振る舞いから、他国にまでファンが多い。
「あ、あなたがいるということは……」
その後ろに、視線を向ける。
薄紫色の髪の少女が立っていた。
ガウンを羽織り、膝まである紺色のスカートを履いている。
その立ち姿に漂う気品と美貌は隠しようもないが、服装だけなら、いかにも市井の少女らしい格好だった。
いつもは宝石で飾っている髪に、今日は花飾りをつけている。

クローディア姫だった。
リベール王国の姫で、次期女王として期待されている王太女。
「驚きました……」
俺は思わずつぶやいていた。
通商会議に出席していたＶＩＰとは聞いていたから、なんとか声をあげることは避けられたが。
にっこりと彼女が笑みをこぼす。
「私も驚きました。遊撃士協会の方から〝とびきり腕がよくて、クロスベルの街なら何でも知っている人物に案内してもらうことになった〟とは聞いていましたが、ロイドさんやエリィさんだったなんて」
過大な評価に、恐縮するばかりだ。
ユリア准佐も口元を緩める。
「元々、市内を見たいと殿下がおっしゃられたとき、最初は君たちに話を持っていこうと思っていたのだ。しかし、特務支援課は警察組織……呼び寄せての面会くらいならまだしも、市内観光など頼んだら警備だ交通整理だと大事になってしまうのではないかと危惧してね」
「たしかに、支援要請は警察本部でも確認していますから、とんでもない騒ぎになっていたと思います」

「そこで、遊撃士協会に頼んだのだが……よく気を回してくれたと言うべきか。それとも、これも運命の巡り合わせなのかな？」

「偶然だと思いますけど……ミシェルさんは、この街で長く遊撃士協会の切り盛りをしてる方ですから。もしかしたら、何か意図があったのかもしれません」

　そう思えるほど、これは意外な再会だった。

　あ、とエリィがリースを紹介する。

「こちら、クロスベル大聖堂のシスターで――」

「えっ⁉」

　声をあげたのは、クローディア姫だった。ユリア准佐も意外そうな顔を見せる。

　リースが丁寧にお辞儀した。

「おひさしぶりです、クローディア姫」

「あら、お知り合いでしたか？」

　エリィの問いに、リースたち三人がうなずく。

「はい」

　クローディア姫が笑みをこぼす。

「今日は喜ばしい再会の多い日です。それにしても、リースさん、たしか、ケビンさんと一緒のはずでは？　お元気かしら？」

「ケビンは元気ですが、この街に来ていません。本来ならば、様々な調査のため彼自身がクロスベル入りをするのが筋ではあったのですが……大司教の目があったので、代わりに私が情報収集役として派遣されています」

「なるほど。そういう事情があるのですね」

「もうロイドさんたちには話してありますが、街中では、私の素性は内緒でお願いします」

「心得ました。ちょっとドキドキしますね」

「はい」

　普通のシスターの振りをする星杯騎士に、市井の少女の振りをするリベール王国のお姫様か。

　俺は胃の痛くなる思いがした。

　グギュギュ～、と地響きのような音があがる。

「ん？　なんだ？」

「あ……」

　リースが困ったような顔をしているのに気付いた。

「どうかしましたか？」

「……私のお腹が悲鳴をあげている」

「そ、そうですか」

　今のは、そういうことか。

くすくす、とクローディア姫やエリィが苦笑した。微笑ましい。

ユリア准佐が、改めて依頼を確認する。

「話は聞いてると思うが、君たちにクロスベルの街を案内してもらいたい。観光地などではなく、市民の日々の生活が知りたい、と殿下はご所望だ」

「わかりました……それでは、気取らないお店で食事などいかがでしょうか？　もう昼は済ませてらっしゃるかもしれませんが」

「フフ……そうだな。空腹の方もいらっしゃるようだし……ん？」

ふらふらと歩きだしたリースを、エリィとクローディア姫が追いかける。

「あ、あの、リースさん⁉」

「どこ行くんです？」

スイーツの屋台の前だった。

「パフェのバスケットサイズをひとつ。大盛りで」

かしこまりました～♪　と屋台のお姉さんが、バケツみたいな器に、どばどばとアイスを詰め、フルーツを乗せていく。

受け取ったリースは、目が据わっていた。

「フレークでの底上げなしのバケツサイズ……ボリュームは文句なし。味のほうは……むっ。甘すぎず、それでいて濃厚。フルーツも新鮮。さすがクロスベルのスイーツ。いい仕事してる」

ぶつぶつと独り言のように並べ立てる。

エリィがため息をついた。

「はぁ、リースさんてば……」

「私も頂こうかしら」

クローディア姫が、そんなことを言い出した。

「えっ？　屋台でお求めになるんですか？　歩きながら食べることになりますけど……？」

おそるおそる、といったふうにエリィが尋ねる。

はい、とクローディア姫はうれしそうにうなずいた。

「そういう経験、普段はできませんし。それに、とっても美味しそうなので」

「わかりました……じゃあ、私も一緒に」

なんだかんだ言って、女の子がスイーツを前にしたら買う方向で話がまとまるものらしい。

俺はユリア准佐にも水を向けてみる。

「買わなくていいんですか？」

「いや、私は遠慮しよう」

「やっぱり、ＳＰとして、気は抜けませんか」

「フフ……実は、甘いものが得意ではないのでね」

「なるほど」

そんなところもクールな人だった。
エリィとクローディア姫が、ワンカップのパフェを購入する。
すかさず、リースが近寄ってきた。
「味見、味見させてください」
「あ、はい」
エリィがスプーンにすくって、差し出す。
はむ、とくわえて。
「むむ……ストロベリーのアイスも、なかなか」
真剣な表情をしていた。
クローディア姫が口元を抑えて笑う。
「ふふっ、リースさん、本当に食べることが好きなんですね。私のも食べてみますか？」
「ありがとうございます。大好きです」
「なんだか、照れちゃいますね」
クローディア姫がスプーンを差し出すと、リースが遠慮なく味見した。
「うん、マンゴー味もなかなか……ちょっと甘いけど、小さいカップならちょうどいい。ナイスな選択」
「…………」



まじまじとユリア准佐が見つめている。
その視線に気付いたか、クローディア姫がやってきた。
「はい、ユリアさんも」
「えっ？」
クローディア姫がスプーンを差し出してくる。
ピンク色のスプーンに乗った、黄色いアイスクリーム。
「あ、でも甘いのは苦手だったかしら？」
「いえ、ひと口くらいなら、うれしいです」
「ほんと、よかった」
クローディア姫の差し出したスプーンに、何秒か置いて、ユリア准佐が口をつけた。
「……はむ」
うれしそうに微笑んでいるお姫様に、准佐が優しげな笑みを返す。
ふたりの表情を見て——彼女たちは仲がいいだけでなく固い信頼関係で結ばれているのだな、と俺は感じるのだった。
それから、リースの提案により、俺たちは龍老飯店に向かった。

龍老飯店での食事は、なかなか好評だった。
そのあと、今度は東通りの屋台を見てまわることになった。
クローディア姫が瞳を輝かせる。
「すごいですね。活気があって」
俺も街に詳しいわけではないが、できるだけ丁寧に説明していく。
「野菜や魚は、ここらが安くて新鮮です。珍しい香辛料などは百貨店で買ったりして、市民は使い分けてますね」
「なるほど」
俺の説明に、ひとつひとつクローディア姫がうなずく。
その後ろにエリィとユリア准佐が付き従い。
最後尾をリースが——
もぐもぐしながらついてくる。いつの間にか饅頭を買っていた。
「あの……リースさん、さっきの東方料理の店では足りませんでしたか？」

「いえ、充分に満足したんですが……」
「ソレは、いったい……？」
「お饅頭が美味しそうだったので」
「な、なるほど」
　到底、真似できそうになかった。むしろ理解できない。
「食べたいですか？」
「お気持ちだけいただいておきます」
「そうですか。ところで、このへんにカフェはありませんか？」
「どうしました？」
「飲み物が欲しいです」
　俺はエリィと顔を見合わせる。
「いいのかな、このままだと、クロスベル観光というより、クロスベルのグルメ観光になっちゃいそうだけど」
「うーん、予想外だったわ。美味しい店に行く予定ではあったけど、ずっと美味しい店を巡ることになるとは思ってなかったから」
　くすくす、とクローディア姫が微笑する。
「かまいませんよ。できれば、みなさんがいつも使っているカフェを教えてください」

　行く先にユリア准佐は意見がないらしく、むしろ周囲を警戒している様子だった。
　この近くで、カフェというと――
　すぐに思い至った。
「いい店があるんです。支援課ビルの近くのカフェに案内します。焼きたてパンが自慢のオープンカフェなんですよ」
「まあ、素敵ですね」

　俺たちは、西通りのベーカリーカフェ《モルジュ》に足を運んだ。
　煉瓦の建物からはパンを焼く香りがただよっている。店の前は、パラソルテーブルのならぶオープンカフェになっていた。
　クローディア姫が、手を合わせる。
「まあ、かわいらしいです」
　納得顔でリースがうなずいた。
「クロスベルでカフェといえば《モルジュ》……いい選択してる」
「リースさんも、よく来るんですか？」
「もちろんです。けれど、いつもはパンを買って帰るだけなので、カフェでゆっくりするのは初めてです。楽しみです」

リースが一足早く店へと入っていく。

このカフェであれば〝市民の日々の生活が知りたい〟という希望に添うのではないだろうか。

店構えを見ていたクローディア姫が、ふと立ち止まった。

「あ、このお店は……」

「何か気になることがありましたか？」

「たしか、クロスベル新聞（タイムズ）に記事が載ってました」

「ああ、以前、紹介されたことがあったとか」

「市民の憩いのお店だそうですね。うれしいです。こういう場所を訪ねてみたかったんです」

「それはよかった。オスカーが聞いたら喜びますよ」

「オスカーさん？」

「あ、俺の幼馴染みが、ここで働いてるんです。店主のモルジュさんの一番弟子として。それに、モルジュさんの娘のベネットも同じくらいがんばってます」

「仲のいいライバル、といった感じかしら？」

「そうですね」

「ふふっ、楽しそうです」

結果的に、リースのおかげで、いい案内になったようだ。そのリースが、あわてて店から飛び出してきた。

いつもの余裕のある表情ではない。

「ロイドさん！　大変です！」

「えっ⁉」

「早く来てください！」

「あ、はい！」

俺は急いで店のなかに入る。

エリィとクローディア姫とユリア准佐もついてきた。

こっちこっち、とカウンターの奥からリースが手招きする。

奥の扉の先は、たしか、パン作りの厨房になっているはず。

入ってしまっていいのかな？　と思いつつ店内を見渡すが、誰もいない。

買い物客の少ない時間帯なので、来客がないのはともかく、店主のモルジュもオスカーもベネットの姿もない。

カウンターに誰もいないというのは初めてのことだ。

嫌な予感がする。

俺は奥の厨房へと急いだ。

そこに、モルジュが倒れていた。

彼を囲んで、オスカーとベネットがしゃがみこんでいる。少し離れてリースも。

　俺は駆け寄った。
「モルジュさん!?　どうしたんですか!?」
「う、う～ん……俺は、もう……ダメだぁ～……」
　うめくモルジュを心配そうに見て、オスカーが声をかける。
「バカ言わないでくださいよ、腰を痛めただけじゃないですか！」
「う～ん……」
「父さん、しっかりして！」
「ベネット……あとは……頼んだぜ……」
「そんな！」
「そのパン生地、ちゃんと焼いて店にならべといてくれよ」
「う、うん。それは、やるけど」
「あと、やわらかい小麦粉が少なくなってるから、ちゃんと注文を……」
「それが大切なのはわかるけど、そんな場合じゃないでしょ!?　父さんってば‼」
　俺は立ち尽くしていた。
「なあ、オスカー……モルジュさんは、腰を？」
「そうなんだ。重たい物は俺が運ぶって言ってんのに、小麦粉の袋を二つも持つからよ」
「どうするんだ？」

「とりあえず、俺がウルスラ病院まで連れてく。ベネット……店は頼むぜ？」
「う、うん！」
　黒髪を留めるヘアバンドを付け直し、ベネットがうなずいた。
　俺は前に進み出る。
「オスカー、それなら、俺たちが病院に……」
「いや。ありがたいけど、親方は俺の師匠であり、親父みたいな人だ。これは俺の役目だと思うんだよ」
「そうか……わかった」
「ロイド、よかったら、ベネットを助けてやってくれ」
「だ、大丈夫よ！　私ひとりだって平気！　早く行きなさいよね」
「おう。病院に着いたら連絡するぜ——さあ、親方、かつぐからな？」
「う～ん……オスカー……すまんな～」
「なに言ってんだ、ウルスラ病院に行けば、すぐ治してくれるさ。よいせっ」
「うう～ん」
　オスカーはモルジュを背負うと、病院に向かった。

　残されたベネットが青ざめた顔をしている。
「どうしよう……」
「ベネット、ひとりで大丈夫なのか？」
「あ、はい。何にしましょう？」
　俺の問いかけに、そんな言葉を返してきた。ちょっと混乱しているようだ。
「いや、まぁ、客として来たんだけど……」
　スンスンとリースが鼻を鳴らす。
「パンの焼ける匂いが強くなってきましたね」
「あっ！」
　ベネットが叫んで、あわてて釜を開けた。
　素早く中からロールパンを取り出す。
「あぶなかった～」
「素晴らしい香りですね。これは、いい焼きたてパンです」

「あ、ありがとうございます」
　リースが絶賛して、ベネットが頬を赤らめた。
　エリィが尋ねる。
「この時間から、まだパンを作るんでしょう？　カフェやレジはどうするの？」
「うっ……それは……ひとりで三人分やるしか……」
「臨時休業が現実的な手段ではないか？」
　ユリア准佐が提案した。
　その通りだろう、と俺も思う。
「それでは、この焼きたてのパンたちがかわいそうです」
　リースが残念そうにつぶやいた。
　エリィも目を伏せる。
　クローディア姫が進み出た。
「あの……よかったら、私にお手伝いさせてもらえませんか？」
「えっ⁉」
　驚いたのは、ベネットばかりではない。その場にいた全員だった。
「素人がお手伝いなんて、かえってお邪魔かもしれませんけど……私、このオープンカフェに来るのが憧れでした。お店が休みになったら、すごく残念です。他のお客さんたちも、同じじ

ゃないかしら？」
　俺はうなずく。
「たしかに、まだ観光客は残っているし、外国からのお客さんも来るだろうな……ベネット、俺にも何かできることがあれば手伝わせてもらうよ」
　エリィも賛同してくれた。
「そうよね。地元の人たちも、このお店のパンを楽しみにしてるはずだもの。私たちに手伝えることないかしら、ベネットさん」
　ベネットがうつむく。
「……オスカーも、父さんの前だから、任せるって言ったけど、臨時休業でも仕方ないって考えてると思う」
　やっぱり難しいか、と諦めかけた。
　しかし、ベネットが、クワッと顔をあげる。
「だからこそ！　なにがなんでも店は閉じたくないんです。私、オスカーを驚かせたいし、父さんやお客さんをガッカリさせたくない――みなさん、力を貸してください！　お願いします‼」
「もちろん」
　これ以上ない、というくらい頭を下げられた。

　俺はうなずいて、エリィも同じだった。
　クローディア姫が、ユリア准佐の手を取る。
「ユリアさん、私のわがまま、聞いてくれますか？」
　一国の王太女が、パン屋の手伝いである。普通なら猛反対してもおかしくない。
　ユリア准佐が考えこむ。
　やがて、キリッと結んだ唇を開いた。
「私が殿下のなさることに反対するはずがありません」
　頭を垂れた。
　クローディア姫が安堵した笑みを浮かべる。
「ありがとう、ユリアさん！」
「いえ、私は殿下がご無事であれば」
「ふふ……それでは、ベネットさん――私とユリアさんは、何をすればいいですか？」
　私も手伝うんですか⁉　という顔をユリア准佐が浮かべた。
　しかし、抗議はせずに指示を待つ。
　なんというか、さすがだった。
　リースが片手を挙げる。
「パンの作り方なら、一通り習得しています。厨房で手伝えることがあるでしょう」

　こちらも、さすがだった。
　ベネットが思案する。
「それじゃあ、ロイドさんは小麦を運んだりといった力仕事をお願いします」
「わかった」
「シスターさんは、私のアシスタントということで厨房を」
「はい」
「エリィさんにレジをお任せして」
「わかったわ」
「おふたりにカフェのウェートレスをお願いしたいのですけど、どうでしょうか？」
　ベネットの提案に、クローディア姫がうなずいた。
「はい。がんばります」
「……客の前に出るのは……いや、厨房よりは安全か。了解した」
　ユリア准佐もうなずく。
　全員が引き受けたところで、改めてベネットが頭を下げる。
「ありがとうございます。あっ、私ったら、まだお名前をうかがってませんでした」
　クローディア姫が固まる。
　ユリア准佐が視線を逸らした。

　まずリースが率先して。
「何度かお店には来ていましたが、名乗るのは初めてですね……先日、クロスベル大聖堂に赴任しましたリース・アルジェントといいます。よろしくお願いします」
「あ、はい。ベネットです。いつもありがとうございます！　今日は、よろしくお願いします！」
　そのやり取りの間に落ち着きを取り戻したクローディア姫が。
「リベールから観光に来ています、クローゼといいます。こちらは、ユリアさん。私たち、学生で親友同士なんです」
「が、学生……？」
　ぼそり、とユリア准佐がつぶやいた。
「なるほど……」
　ベネットがいぶかしむ。
「……う～ん、どこかで見たことがあるような？」
　俺は冷や汗を垂らした。
　どこかで見たことがある？　それは、新聞の記事じゃないかな？
　俺はベネットをうながして。
「早く準備をしよう、慣れてない仕事だから、いろいろ教えてもらわないと」
「そうね。あ、替えのエプロンを出すから。みんな、それを付けて」

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！



3名様

『も～っと集まれ！ファルコム学園』缶バッジ

大人気!! オリジナル缶バッジを5個セットで3名にプレゼント！ ※絵柄はランダムです。

ご応募は特設サイトまで▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、（falmaga@field-y.co.jp）まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.185プレゼント係

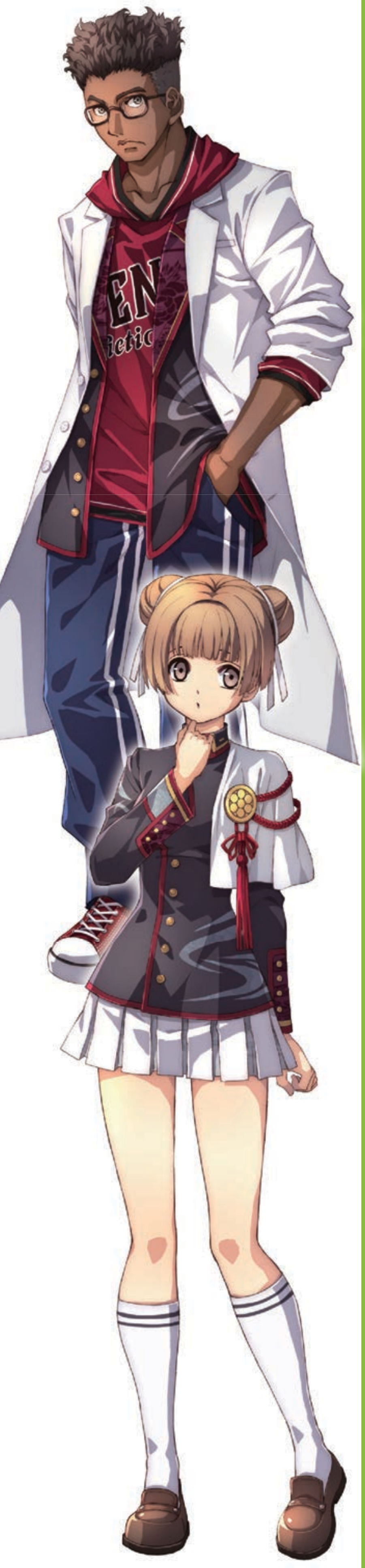
1：お名前（ペンネーム可）
2：面白かった記事の番号→
　　つまらなかった記事の番号→（記事一覧から1つずつ）
3：アンケート①『京都ザナドゥ』試遊会に参加した／する予定はありますか？
　　アンケート②日本ファルコム作品の実況プレイを観たことがありますか？
4：希望するプレゼント番号
5：ご意見・ご感想など

記事一覧

1:『京都ザナドゥ -桜花幻舞-』特集
2:『空の軌跡 the 2nd』特集
3:も～っと集まれ！ ファルコム学園
4:ファルコムニュース
5:啄木鳥しんきのファルコム日和
6:英雄伝説 碧の軌跡 いつか貴方とお茶会を

応募締め切り　7月27日（月）

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol. 185

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/